

さらなる発展を目指して

日本総合歯科学会
理事長 樋口 勝規

本学会の歴史を振り返ってみますと、前身である総合歯科協議会が2008年8月に設立され、本年度(2016年)は9年目を迎えることになります。この間、会員数および事業規模が徐々に拡大して学会へ移行し、来年度は記念すべき10年目を迎えます。学術研究の成果の証である学会誌は、充実した査読制度により学会HPに掲載しています。そのHPに関しましては、木尾哲朗広報委員長の奮闘により、素晴らしい構成・デザインに改訂することが出来ました。

さて、昨年の活動を振り返ってみますと、第8回総会・学術大会(日本歯科大学 岡田智雄会長)が大盛會裏に終わりました。開催期間中は各委員会の開催、学術大会や若手セッションの発表など充実した毎日でした。他の大きな項目は、認定医制度の施行および本学会ロゴマークの決定です。一方、本学会にご尽力いただいた池田和博先生の訃報にも接しました。そこで、これらの報告と今後の方針について述べてみます。

1. 認定制度の施行

河野文昭委員長のもと、認定制度委員会および研修施設資格審査委員会のご尽力により、総合歯科学会の認定総合歯科医37名、指導医22名および認定研修施設14施設が承認されました。承認された先生方は今後とも活躍いただき、後進の指導を宜しく願います。

2. 本学会のロゴマーク決定

広報委員会(木尾哲朗委員長)によりロゴマークの募集を行ってきましたが、4名8作品が応募されました。第8回総会の開催期間に、会員による投票を行って、長谷川先生(昭和大学)の作品が選出されました。その後、業者に依頼してブラッシュアップを行いましたので、近いうちにHPに掲載の予定です。

3. 池田和博先生 ご逝去

北海道医療大学准教授の池田和博先生が、一年余の闘病生活を経てご逝去されました。先生は、学術委員会のメンバーとして本学会の発展に多大なる貢献をされ、第6回総会・学術大会のシンポジウム「総合歯科医に求められるコンピテンスと評価の具現化について」においては、シンポジストとして歯科補綴の立場からご講演をお願いしました。先生は未だ若く、志半ばで病魔に屈せられたことは真に残念だったと思いま

す。ここに謹んでお悔み申し上げます。有難うございました。享年54歳 合掌

4. 今後の方針

今後の歯科医療形態は、2025年に向けて変革が進み、超高齢社会に対応すべく多職種連携を基盤とした共同診療、特に地域歯科医療(在宅訪問診療)、周術期口腔機能管理や摂食嚥下リハビリテーションなどの構築が求められています。本学会のテーマの一つが医療連携および統合型歯科医療の探求にあることから、私は機会あるごとに医科歯科連携診療の重要性を述べてまいりましたが、改めて「国民が納得する歯科医療とは何か」を考え、総合歯科の立ち位置を整理する時期だと思えます。医療のバリアフリー化が進み、歯科だけの独立した医療形態がなくなっていく時代ですから、歯科の中でも保存や補綴などの専門診療科の垣根を越え、さらに医学的知識を加えた統合的な知識と技術が求められていく時代に突入したと思っています。この問題は、まさに本学会の核心に触れていると思えます。このような背景をふまえて、学術委員会(鳥井康弘委員長)にお願いして「日本総合歯科学会認定総合歯科医・専門研修カリキュラム」の策定を検討しています。

医科では、信頼される医療の確立に向けて、地域偏在や診療科偏在をなくし、国民に分かりやすい新たな専門医制度が2017年度から開始される予定です。歯科界においても検討が進められていることは、周知のことと思います。本学会も今後の進むべき方向について慎重に検討していかなければなりません。本学会の設立までの第一ステージが終わり、学会設立後の第二ステージが始まって、3年が経とうとしています。今後は、歯科界全体における専門医制度への対応を念頭に、step upの時期に向けた方策が必要です。

本学会が発展していくためには、大学以外の一般歯科診療所や病院歯科・口腔外科の歯科医療関係者の諸氏にも本学会にご入会の上、多方面からの検討を重ねていきたいと考えています。

会員諸氏におかれましては、如上の段をお含みいただき、多くの方に入会の声をかけていただくようお願いいたします。